

時評

高山 靖子



トルコ女性組合の成長に学ぶ

持続性ある支援の大切さ

SNSなどを通じ国内外の展覧会情報に日々触れる中、今年はトルコ・イズミル県のカラバーラル地区で活動するチャルクシュ女性協同組合の作品群にひとときわ引きつけられた。彼女たちの活動には現地の大学教員らとともに2022年、筆者もアドバイザーとして参加したが、その時の印象から格段に向上した作品の精緻さやデザイン性に驚かされた。

組合の活動はイズミル県による社会開発支援プログラムの一環として、カラバーラル行政区主導の下で推進されている。女性たちの手工芸技術を生かして製品を生産し、カラバーラル地区のブランドとして販売することにより、彼女たちの収入を得る機会と社会との接点を提供することを目的としている。移民が多く、独自の伝統的な手工芸がないこの地区は、見方を変えれば各地からさまざまな手工芸技術を持った女性が集まっているともいえる。その多様な手工芸を文化にまで昇華させようと試みているのだ。

支援に入った大学教員らは、土地とそれぞれの女性作家の作品を結びつけるためのディレクションやコーディネーション、いわばクリエイターを育成するマネジメントとブランド化への誘導に力を尽くした。これには、大学教育における教員の知見と技術を効果的に導入し、分かりやすい目標設定や相互に学び合う仕組みづくりで参加者のモチベーションの維持と技術の向上を後押しした。直接デザインを提供したり指示したりする支援は、一時的には成果を得られても持続性がないからだ。

地域の家具メーカーは販路の提供を行い、行政側は展示会への出展やプロモーション活動のためのECサイト構築に向けた教育を提供することにより、将来的に自立して販路拡大を行うための支援も行っている。

食を重視するトルコらしい支援とし

て、家族（主に夫）の理解を得て外出の後ろめたさを軽減できるように、会合終了後に家に持ち帰る夕食を提供したり、託児所を運営したりして、参加者に寄り添って社会の意識改革も促している。

今も昔も、日本の大学に対しては「若い力で」「若い人のアイデアを」という協力依頼が寄せられることが多い。もちろん、学生とともに地域に貢献することは本望である。しかし、時にはそれが一過性のイベントとなり同じことを繰り返している状況を見ると、誰のための、何のための試みだったのか、と考えることがある。

見事花開いたトルコ女性たちの作品を見ながら、トルコとは異なる社会課題を抱える日本で、何ができるのかを考えさせられた。

（静岡文化芸術大デザイン学部教授）

たかやま・やすこ 1966年、愛知県生まれ。同県立芸術大美術学部卒。東芝デザインセンター、同大非常勤講師などを経て2007年に静岡文化芸術大着任。15年から現職。専門はプロダクトデザイン、デザインマネジメント。芸術工学博士。トルコ・イズミル経済大などとの国際交流もライフワークとする。

2024年11月27日
静岡新聞(朝刊) p 6